

Title	正岡子規が読んだ江戸漢詩詞華集：『才子必誦崑山片玉』及び『日本名家詩選』について
Sub Title	On kanshi anthologies referred by Masaoka Shiki : how the Meiji era literati understood sintic poetry written by early modern Japanese
Author	合山, 林太郎(Gōyama, Rintarō)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2017
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.113, No.1 (2017. 12) ,p.230- 248
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	田坂憲二教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01130001-0230">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01130001-0230</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 正岡子規が読んだ江戸漢詩詞華集

——『才子必誦 崑山片玉』及び『日本名家詩選』について——

合山 林太郎

正岡子規は、生涯で六百首近い漢詩を制作しており、その過程で、中国の古典詩だけではなく、近世日本の漢詩から多くを学んだ。その様相は、子規の文芸の理解という側面だけではなく、近代における近世日本漢詩の受容という点からも貴重な情報源となる。

子規が、江戸時代の漢詩を学んでいたことは、様々な資料から確認できる。たとえば、彼が、少年時代に頼山陽の詩を読みふけたことは、しばしば引用される「余十五六の時詩を作るに、持てる詩集とは山陽詩鈔四冊あるのみ」（書中の新年）『日本』明治三四年（一九〇一）一月六日）という彼の回想から、よく知られている。また、こうした漢詩を抄出したノートとして、菅茶山、広瀬旭莊、頼杏坪らの詩の抄録である『黄陽夕陽村舎詩・遠思樓詩卷・春草堂詩鈔』（各詩人の別集と同題の、子規の手になる写本）や、歳末の情緒を詠った詩のみを集めた『歳晚類集』などが残っている。

こうした子規の手になる漢詩の抄録の中でも最大のものとして、『随録詩集』というノートがある。この『随録詩集』には、第一編（法政大学図書館蔵）、第二編（国立国会図書館蔵）、第四編（同）の三冊が残り、中国・日本の様々な文学者の

漢詩、千首以上が収録されているのであるが、何を見ながらこうしたノートが作られたのが、これまで分かっていなかった。別の言い方をすれば、子規がどのような詩集を見ながら、このような抄出を行ったのか、その詳細が不明であった。

様々な資料と照合した結果、これらのノートのうち、『随録詩集 第一編』について、記載された詩の一部が、『才子必誦 崑山片玉』と『日本名家詩選』という二つの詞華集から抄出された可能性が高いことが明らかとなった。本稿では、これらの詞華集の近世・近代の日本漢詩史上の意味、子規の漢詩制作における意味について考えてゆく。<sup>①</sup>

## 一 『随録詩集 第一編』について

まず、『随録詩集 第一編』について、その概略を示したい。この冊子は、江戸・明治の儒者・詩人約一二〇名の漢詩約二六〇首を抄録したものである。<sup>②</sup> 正岡子規の自筆とされており、実際に、ほぼ直角に曲がる線で構成される「之（しんにゅう）」などは、他の子規自筆の写本と共通している。

抄出の対象には変化があり、はじめに近世中後期の儒学者や詩人の詩が写された後、外祖父大原観山をはじめとする伊予・松山近辺の詩人や讃岐の詩人の作が録され、その間に、江戸・明治期の儒者、大名、政治家らの詩も記されている。抄写された詩篇の一部は、墨の取り消し線によって削除され、また、丁の一部が切り取られている。これらの点から、一端書き出した後も、収録詩をめぐって様々に思案していたことが想像される。

この『随録詩集 第一編』が筆写された時期は、明治二四年（一八九二）頃と断定できる。それは、『第一編』の後半に記される大原観山の「椎牛行」<sup>③</sup>に、それが「明治廿四年二月廿日」（子規は二五歳）の書写であることを明記した子規自身の文章が記されているからである。<sup>④</sup>

この文章において、子規は、七、八歳の時、この「椎牛行」詩を観山から与えられ、復誦させられたと回想している。詩は、牛が食用に供されるため、その額を槌によって撃たれ、屠殺される画面を描いているが、これは、西洋文化が流入し、日本の伝統や美俗が失われることに対する観山の懸念を示すために取り上げられたものであった。しかし、幼い子規はその

真意を理解せず、「椎牛行」は、単に牛肉を食べてはならないと主張するために作られたと考えていたと言う。観山が亡くなり、この詩のことも忘れていたが、抄出に際して、あらためて往時を思い起こし、感慨で胸が一杯になったと述べている。ただ、『随録詩集 第一編』の原型が作られた時期は、この明治二四年よりもさかのぼる可能性がある。すなわち、今日残る『随録詩集』はすでに制作されていた稿本を浄書し、まとめたものであり、その草稿は、筆写する以前に、すでに出来上がっていたのではないかも考えられるのである。その場合、先に見た子規の「椎牛行」に関する文章は、すでにある抄写を書き写す際に、新たに付け加えられたものと推測することができる。

このように考える根拠の一つを挙げる。この詩集には、明治期の詩人の作も多く収録されているが、その中に、明治一〇年代の『郵便報知新聞』の漢詩欄「文苑雅賞」に掲載された詩が、数首収録されている。巖松軒「売花翁」（『郵便報知新聞』明治一四年（一八八一）六月二一日）、同「春江独釣図」（同、明治一四年六月二三日）、柳崖樵客「山居佳適」（同、明治一四年七月九日）、宮崎津城「花後所見、次巽軒詞兄韻」（同、明治一四年七月一日）などがそれにあたる。『随録詩集 第一編』における、以上の詩の抄出は、必ずしも『郵便報知新聞』の掲載日の順番にはなっておらず、不審な点もあるが、これらの、知名度が高くない漢詩人の作を、子規が、後年、目にする可能性は低いように思うのである。

なお、『随録詩集』は第一、二、四編が存在し、第三編が欠けている。『瀬祭書屋蔵書目録』（国立国会図書館蔵）には、「一 随録詩集 三冊」と記されており、子規存命中より、一冊の欠損が生じていたことが分かる。このうち、第二編と第四編については、早くからその存在が知られており、様々に考証がなされている。たとえば、渡部勝己氏は、「明治二三年頃のもの」と推定する（『子規全集』九卷、講談社、一九七七年、八四二頁）と解説している。

## 二 『才子必誦 崑山片玉』からの抄出状況

『随録詩集 第一編』編纂のプロセスすべてを知ることはできない。しかし、それが何を参照して作られたのかについては、部分的に明らかにすることができる。

『随録詩集 第一編』が記される際、参照された詩集の一つは、村尾元矩編『才子必誦 崑山片玉』（明治八年（一八七五）刊）である。この詞華集は、江戸から明治期にかけての儒者や漢詩人、大名、政治家、官僚らの詩約二〇〇首を収録しており、律詩、絶句、古詩など、様々な詩体の詩が収録されている。初版刊行の後、明治十三年（一八八〇）にも再印されており、かなり流布していたと考えられる。<sup>5)</sup>

『随録詩集 第一編』冒頭には、荻生徂徠「送菅麟嶼之京師（菅麟嶼の京師に之くを送る）」から藤田東湖「金沙山」までの一二首が記されているが、これらはいずれも『才子必誦 崑山片玉』から抄出されたものと考えられる。このことは、詩の配列や、字句の異同等から分かる。

まず、これら一二首の詩の『随録詩集 第一編』における配列が、『才子必誦 崑山片玉』のそれと一致している。『才子必誦 崑山片玉』の詩の一部が、『随録詩集 第一編』に記されているのだが、それが現れる順番が、両者の間で共通しているのである（文末の表1、表2を参照）。

また、作者名の表示方法の点でも二つの資料は類似している。たとえば、『随録詩集 第一編』では、「物徂徠」「柴栗山」「柏如亭」など、修姓で作者名が記されている箇所があるが、こうした点も含め、本書の作者名の記載のあり方は、ほぼすべて『才子必誦 崑山片玉』と同じである。以上のことから、子規が、『才子必誦 崑山片玉』を読んでいたことは明らかと言えよう。

なお、この詞華集の編者である村尾元矩（号・嘯山）は、伊予・西条に生まれ、嘉永三、四年（一八五〇、五一）頃、『続日本紀考証』を完成させた考証家村尾元融の家に養子に入ったと言われている。この『才子必誦 崑山片玉』編纂時には東京におり、著述に専念していたと推測される。元矩は、『今古詩』（明治九年（一八七六）刊）、『崑岡遺玉』（明治一〇年（一八七七）刊）などをはじめ、複数の漢詩詞華集を編んでいる。<sup>6)</sup>

### 三 『日本名家詩選』からの抄出状況

『才子必誦 崑山片玉』とともに、『随録詩集 第一編』編集に際して参照された別の詞華集に、『日本名家詩選』があ

る。この詞華集は、江戸中期の儒者や詩人の詩約五四〇首が収録されている。五古、七古、五律、五言排律、七律、五絶、七絶の順に巻が割り当てられているが、これは『唐詩選』の体裁に倣ったものである。

『随録詩集 第一編』前半に収録されている荻生徂徠「新嫁娘」から釈玄海「送人之駿州（人の駿州に之くを送る）」までの四二首は、この詞華集の巻六・七に掲載される詩篇の中から抄出されたものである（文末の表1、表3を参照）。このことは、『才子必誦 崑山片玉』と同じように、両資料の間で、詩の掲載順や作者名の表示の方法が一致することから分かる。

この『日本名家詩選』には、複数の書肆による版が確認できる。筆者が寓目した範囲では、伏見屋善六版（安永四年（一七六七）刊）、山崎金兵衛版（同刊）、小林新兵衛版（寛政一〇（一七八九）年刊）があり、とくに『唐詩選』関係書の版元として知られる小林新兵衛によって刊行された後、ひろく読まれたと想像される。

『日本名家詩選』の編者首藤水晶（元文五年（一七四〇）～安永元年（一七七二））は美濃岩村の人であり、南宮大湫の門に学んだ。南宮が江戸に塾を開くと、師に従って江戸に移ったが、後年、桑名・江戸を転々とし、子弟に教授した。

水晶の師の南宮大湫は、序において、本書ははじめ別人が編輯する予定であったが、多忙のため完成できず、水晶が代わって編むことになったと述べている。その上で、三十歳代前半の水晶が、大家の詩を編纂することについて、様々な噂が立ち、場合によっては非難を受けることになるのではないかと危惧している。すなわち、水晶は当時の詩壇の中心的人物ではなく、この書を編纂することになったのは偶発的な要因によるものであった。

ただ、水晶は本書の編纂に熱意をもって取り組んだようであり、その凡例からは、水晶の選詩における細やかな配慮と同時に、強い信念が看取される。たとえば、彼は、各人の別集の大小によって、収録した詩の数に差が出ているが、それは詩の巧拙とは関係ないと述べている。その一方で、総集から詩を採る場合には取捨選択を行い、『名家詩選』という書名にふさわしい作のみを採ったと主張している。

このほか、凡例では、底本の如何にかかわらず、収録詩には、独自に添えがなやルビを振ったことが説明されており、本書が、初学者を讀者として想定していたことがうかがえる。

#### 四 抄出のあり方から見える子規の漢詩学習の様相

『随録詩集 第一編』については、『日本名家詩選』や『才子必誦 崑山片玉』の掲載詩と比較することによって、何が選ばれて何が選ばれていないのかが明らかとなり、ここから、子規の詩に対する考え方をうかがうことができる。

『才子必誦 崑山片玉』に関して言えば（文末の表2を参照）、比喩などが用いられ、表現に面白みのある詩を多く採るといふ傾向がある。たとえば、柴野栗山「答人求旧草（人の旧草を求むるに答ふ）」は、かつて書いた文稿を、人から求められて謝絶するという内容である。「欲書旧草問諸君、旧草風吹飛作雲。君去試看京洛上、風花雲月是我文（旧草を書きて諸君に問はんと欲すれど、旧草は 風吹きて 飛びて雲と作る。君 去りて 試みに看よ 京洛の上、風花 雲月 是れ我が文）」と詠い、単に依頼を断るのではなく、文稿は、すでに風に吹かれて京の空の雲や花、月になってしまったと述べている。また、柏木如亭「別硯詩并序」は、「風月場中不慳離、一朝臨別淚如絲。柏郎心緒君知否、大曆詩人嫁妓時（風月場中慳くも離れず、一朝 別れに臨んで 涙は糸の如し。柏郎の心緒 君 知るや否や、大曆の詩人 妓を嫁する時）」というものであるが、これは、中唐の詩人司空曙「病中遣妓（病中に妓を遣る）」を踏まえつつ、硯を妓にみたて、硯を手放すことの悲しみを、長年親しんだ妓に別れることに譬えながら詠っているのである。

一方、自らの志や信条を述べた詩は、あまり採られていないように思われる。個々の詩の巧拙によって判断した部分もあると思われるが、抄出されなかった詩のうち、中村惕斎「自題肖像」、細井平洲「感懷」、木村貞行「述懷」、蒲生君平「謾作」などは、みなこの系統の作である。

『日本名家詩選』では（文末の表3参照）、表現に面白味のある作とともに、艶詩に注目しているように思われる。『随録詩集 第一編』には、近藤蘆隱（藤舜政）「閨怨」や秋山玉山「前漢女」、梁田蛻巖「艶曲」、田坂瀨山（田長温）「西宮春怨」、那波南陽（祐昌）「背面美人図」などが抄出されており、贈答の詩や叙景詩と比較して、抄出の比率が高いように思われる。とくに、秋山玉山「古意」のような「妾心如浣素、郎心如洗紅。浣素素愈白、洗紅紅漸空（妾が心は 素を洗ふが如

し、郎が心は 紅は洗ふが如し。素を流へば 素は愈よ白し、紅を洗へば 紅は漸く空し」などの、単純であるが、表現が明快な詩が多く採られているように思われる。これは、女性が自らの恋情を詠うという設定で作られた詩であり、男性の軽薄な気持ち、水を晒せば色が褪せる紅の布に、自身の一途な思いを洗えばより美しさの増す白い布に喩えている。

なお、抄出された詩には、市河寛齋「東坡赤壁図」や平野金華「早発深川（早に深川を発す）」などの、近世期以来、名詩として知られるものも多くある。ただ、有名な服部南郭「夜下墨水（夜 墨水を下る）」などは、採られておらず、このあたり、どのような基準で書き出したのかは定かではない。

## 五 柴野栗山「富士山」詩に見る詞華集からの影響

以上に見た詞華集からの抄書が、子規の著作に影響していると考えられる例を一つ紹介しよう。子規は「東洋八景」（『日本』明治三一年（一八九八）一月一日）という文章があるが、この中で引用された柴野栗山「富士山」（あるいは「富岳」）に、彼の『才子必誦 崑山片玉』受容の痕跡を見出すことができる。まず、「富士山」の詩を『栗山堂詩集』（写本、後、明治三九年（一九〇六）刊の中川伝平による活字本に翻刻される、本稿ではこの活字本を使用）より掲出する。

誰將東海水、濯出玉芙蓉。蟠地三州尽、挿天八葉重。雲霞蒸大麓、日月避中峯。独立原無競、自為衆嶽宗。

（誰か東海の水をもつて、濯あらひ出す 玉芙蓉。地に蟠わたつて 三州尽き、天に挿さんで八葉重なりたり。雲霞 大麓に 蒸し、日月中峯を避く。独立もと競ふ無く、自ら衆嶽の宗と為る）

富士山について、その優れた山容を描き出しながら、それが他の峰々の宗主であると詠っている。

この「富士山」の詩句の一部が、子規の「東洋八景」では、通行の形とは異なる形で記録されており、それは、次に掲げるように、『才子必誦 崑山片玉』及び、それを写したと考えられる『随録詩集 第一編』と部分的に一致している。

頷聯は、富士山が甲斐、駿河、相模の三国に根を張り、山頂部の八弁の花（富士八峰を指す）が空に聳えているという意味であるが、『才子必誦 崑山片玉』では、各句の冒頭が「地に絶して」「天に挟さんで」と、『栗山堂詩集』と異なる形で

資料名	承句	結句
『栗山堂詩集』	蟠地三州尽、 <b>挿</b> 天八葉重	独立原無競、自為衆 <b>嶽</b> 宗
『東洋八景』	蟠地三州尽、 <b>挾</b> 天八葉重	独立原無競、自為衆 <b>壑</b> 宗
『随録詩集 第一編』	絶(蟠)地三州尽、 <b>挾</b> (擊)天八葉重	独立原無競、自為衆 <b>壑</b> 宗
『才子必誦 崑山片玉』	絶地三州尽、 <b>挾</b> 天八葉重	独立原無競、自為衆 <b>壑</b> 宗

掲出されている。『随録詩集 第一編』は、最初、この形をそのまま写したが、後に別字(右表の括弧内の文字)を記し、それぞれ「地に蟠つて」と「天を撃<sup>さ</sup>げて」という別案を示すに至った。「東洋八景」では、第三句が新たに書き加えられた形で、第四句は『才子必誦 崑山片玉』と同じ形で記されることとなった。これは、子規が、ある時点で字句の違いに気が付き、校合を施したが、実際の文章で執筆する際には、以前見た形が、部分的に出たものと解せるだろう。

また、尾聯は、富士山が他の峰に秀でて立ち、様々な山の宗主であると述べている。この箇所は、通常、「衆嶽」に作るが、子規は、「衆壑」と記している。つまり、『才子必誦 崑山片玉』や『随録詩集 第一編』と同じ形で引用している。

栗山のこの詩は名詩選にも収録され、また写本でも伝わり、異同も多くあると考えられるが、こうした事象は、子規が、この詩を、『才子必誦 崑山片玉』で学び、異文を含む形で『随録詩集 第一編』に記録し、それが自身の文章に反映されたと考えるとき、もつともよく説明できる。詞華集からの抄出は、子規の文筆に影響を与えていたと言えるのである。

## 六 近世漢詩史の中での初学者向け詞華集の位置づけ

最後に、子規がこれらの詞華集を読んだという事実が、近世漢詩史研究において、どのような意味を持つかについて考えたい。

江戸時代の漢詩詞華集については、これまで、様々な実証研究が積み重ねられてきた。ただ、その際、検討対象となる詞

華集は、多くの場合、同時代の代表的な詩人の作を集めたものや、詩壇の活動と密接に連動して編纂されたものであった。<sup>11)</sup>『日本名家詩選』のような、古今の詩人を読みやすい形で収載した、いわばハンディー版のような詞華集は、必ずしも十分に分析されてこなかったのである。

明治初期の漢詩研究では、近世以来の漢詩壇の営みの中で編まれた詞華集が検討されるとともに、維新时期以降の草莽の志士の和歌や詩文を収めた詞華集の刊行や、明治一〇年前後の明治新政府の政治家・官僚の詩文を掲載したアンソロジーの出版の盛行<sup>12)</sup>についても考究がなされてきた。ただ、『才子必誦 崑山片玉』のような、近世期の儒者・漢詩人を含む詞華集については、やはり注目されていない。

しかし、こうした手に取りやすい詩集が、権威ある詩集よりもかえって影響力を持つことは珍しいことではないし、実際に、子規はこうした書籍を読んでいたのである。江戸時代の漢詩の明治における受容に際して、それらが重要な窓口として機能したと考えるべきであろう。今後は二書のような、初学者向けで、より親しみやすい詞華集が、漢詩文化の形成に果たした役割についても、積極的に考察してゆく必要がある。

なお、『才子必誦 崑山片玉』については、子規以外にも、たとえば、『新体詩抄』の編者である井上哲次郎によって参照されている。井上は、巽軒<sup>そげん</sup>という号を持つ漢詩人としても知られているが、彼が青年期に漢詩文を抄録して成った『今古詩集丑集』（東京都立図書館井上文庫蔵）というノートには、木戸孝允「木香山中」をはじめ、九首の詩が、『才子必誦 崑山片玉』から抄出されていることを確認できる。<sup>13)</sup>

また、『日本名家詩選』については、後代の詞華集編纂などに一定の影響力を持っていたように思われる。たとえば、戦前に広く読まれた漢詩注解書、すなわち、結城蕃堂『和漢名詩鈔』（文芸堂書店、明治四二年（一九〇九））や『続和漢名詩鈔』（同、大正四年（一九一五））、簡野道明『和漢名詩類選評釈』（明治書院、同）などを見ると、この『日本名家詩選』に採られた詩と同じ詩を収録している場合がある。たとえば、荻生徂徠の詩などは、著名な江村北海の『日本詩選』（安永三年（一七七四）刊）などよりも、『日本名家詩選』の方が、掲載された詩に共通するものが多い。<sup>14)</sup>

おわりに

本稿では、正岡子規の手になる『随録詩集 第一編』冒頭に書き留められた詩篇の一部が、『才子必誦 崑山片玉』及び『日本名家詩選』から抄出されたものであることを指摘した。このことは、子規の漢詩や明治期における江戸漢詩文化の受容を考える上で、重要な分析の糸口となるだろう。

注

(1) 子規の漢詩稿については、加藤国安氏が精力的に論考を発表している。加藤氏は、『子規蔵書と『漢詩稿』研究―近代俳句成立の過程―』（研文出版、二〇一四年）において、これらの詩稿と子規漢詩との関係性について指摘している。また、『科学研究費基盤研究C報告書 『子規全集』未収録・自筆漢詩抜粋写本―『随録詩集』等翻刻・解題』（二〇一六年三月、課題番号二四五二〇三九〇）において、『随録詩集 第一編』をはじめ、多くの稿本の翻刻を行った。本論は、加藤氏の研究により多く学恩を蒙っている。

(2) 以下、『随録詩集 第一編』の簡略な書誌を記す。写本。大本（二五・三×一七・一<sup>枚</sup>）。一冊。仮綴。共紙表紙。外題「随録詩集 第一編」（左・墨書）。内題「随録詩集」。字高一七・八〜一八・〇<sup>枚</sup>。楮紙。墨書。半葉二〇字×一〇行。五十三丁。切り取り有（一七丁の部分、二九丁裏、三八・三九丁の部分）。印記「瀨祭書屋図書」（表紙中央下部、朱文方印）。表紙に裏打あり。なお、法政大学図書館正岡子規文庫デジタルアーカイブ (<http://www.hosei.ac.jp/library/collection/kichosho/shikibunko.html>) により閲覧できる。

(3) 『法政大学図書館蔵正岡子規文庫目録』（法政大学図書館、一九九六年）に「子規自筆」とある（二四八〜二四九頁）。

(4) 該当部分の白文及び訓読を以下に掲げる「余七八歳時、観山翁書此詩以賜余、且使余暗誦之。余因不能解其意、只知其意在不可食牛肉、日夜復習略記之。無幾翁捐館。余亦全忘此詩、一句不記。今復見之、不堪今昔之感。謹抄録云。翁与世不合。厭忌西夷

如糞土。世人以為頑冥、而余亦然之。然及今思之、則有所大服翁之高見焉。如此詩結末二句、与今日之世情相距、実幾許。噫。明治廿四年二月廿日、外孫常規謹識（余、七八歳の時、觀山翁、此の詩を書して、以て余に賜ひ、且つ余をして之を暗誦せしむ。余、其の意を解する能はざるに因りて、只だ其の意の牛肉を食すべからざるに在るを知り、日夜復習し、略ぼ之を記す。幾くも無くして、翁、捐館す。余も亦た全く此の詩を忘れ、一句として記せず。今、復た之を見て、今昔の感に堪へず。謹んで抄録するのみ。翁、世と合はず、西夷を厭忌すること、糞土の如し。世人、以て頑冥と為す。而して余も亦た之を然りとす。然れども今に及んで之を思へば、則ち大いに翁の高見に服する所有るなり。此の詩の結末の二句の如きは、今日の世情と相ひ距たること、実に幾許ぞ。噫。（下略）」。子規の評中に言及される「椎牛行」の末尾二句とは、「人情逐日慣残酷、偏恐将来人相食。（人情日を逐ひて残酷たるに慣れたり、偏へに恐る 将来 人 相ひ食ふを）」というものであり、子規は、将来は人間同士が互いに對して冷酷になるのではないかという觀山の不安が、明治二四年の時点で、現実のものになったと述べている。

(5)

以下、「才子必誦 崑山片玉」（明治八年版、架蔵）について簡略な書誌を記す。刊本。中本。二冊二卷。見返し「湖山小野先生 閱 嘯山村尾先生編輯／才子必誦 崑山片玉／明治乙亥新編」。大原益壯（重徳）題詞。城井寿章序（明治八年六月上旬）。横山徳溪（明治八年四月上旬）。波山人画。外題「才子必誦」 崑山片玉 村尾元矩輯 前（後）「子持ち杵」。内題「崑山片玉上（下）」 奥付「官許 明治八年五月廿五日／同八年十二月刻成／編輯人 第六大区八小区本所若宮町九十番地 東京府士族 村尾元矩／出版人 第五大区六小区下谷車坂町九十二番地 東京府士族 城井寿章／発売人 第五大区二小区浅草片町二十八番地 瀬山庄助／発売人 第五大区一小区浅草須賀町二十三番地 松崎半造」。価格三十錢。なお、明治一三年版（架蔵）の奥付は、「明治八年五月廿五出版御届／同十三年二月廿六日買請御届／編輯者 東京府士族 村尾元矩 本所区若宮町九十番地／出版人 長野県平民 高美甚左衛門 信州松本南深志町一番地／発兌人 東京 北畠茂兵衛 日本橋区通一丁目」とある。

(6)

村尾元矩の事跡については、森銃三「村尾元融伝の研究」（『森銃三著作集』第七卷、中央公論社、一九七一年）及び、同書に紹介される井口兵右衛門『函館游寓名士伝』（明治二五年）を参照した。

(7)

以下、『日本名家詩選』（伏見屋善六版、架蔵）について、簡略な書誌を記す。小本。三卷一冊（合冊の可能性あり）。南宮大湫序（明和八年冬至）。遊花叟（林鳳谷）序。内山政陽題詩。太室井孝徳（渋井太室）跋。外題剝落。見返し「水晶藤元曷編輯／日本名家詩選／江戸書肆 大觀堂梓」。内題「日本名家詩選卷之一（一七）」。柱刻「名家詩選（丁教）、ただし、各巻第一丁に「金蘭社蔵」。奥付「明和八年辛卯年春梓成／安永四乙未年春発行／田中氏蔵（「豊」（朱文））／江戸 本石町三丁目十軒店 伏見屋善六」。なお、山崎金兵衛版（架蔵）は、見返しに「水晶藤元曷編輯／日本名家詩選／江戸書肆 山金堂寿梓」、奥付が「明

和八年辛卯年春梓成／安永四乙未年春發行／田中氏藏／江戸 本石町三丁目十軒店 山崎金兵衛」となる。小林新兵衛版（架蔵）は、見返しに「水晶藤元昺編輯／日本名家詩選／寛政戊午再刻 高山房梓」、柱刻の「金蘭社蔵」は無くならず、奥付に「寛政戊午年五月再版／書肆高山房蔵版／江戸 小林新兵衛梓」となる。

(8) 南宮大湫「刻日本詩選序」の關係する箇所について、白文・訓読を掲げる。「南部川之長、浪華左士常、嘗欲采本邦之詩以梓之、乃託山某者、以講授無暇不能卒業。於是使藤文二代其役。文二旁搜博采、采詩數百首輯為數卷、古詩律絕莫不兼綜焉。茲歲辛卯春文二来寓家塾、乃出其詩選者示余曰（略）余受而讀之、掩卷而歎曰、（略）子誠銳進以輯諸老之詩、其在諸老、則不甘子之萃者、或多矣（下略）。（南部の川之長、浪華の左士常、嘗て本邦の詩を采りて、以て之を梓せんとす。乃ち山某なる者に託すも、講授に暇無きを以て業を卒ふるあたはず。是に於て藤文二（筆者注 首藤水晶のこと）をして其の役に代らしむ。文二、旁搜博采し、詩、數百首を采りて輯めて數卷と為し、古詩、律、絶、兼綜せざるはなし。茲の歲辛卯の春、文二、家塾に来寓し、乃ち其の詩選なる者を出して、余に示して曰く（略）余、受けて之を讀む。卷を掩ひて歎じて曰く（略）子（筆者注 水晶のこと）、誠に銳進し、以て諸老の詩を輯む。其の諸老に在りては、則ち子の萃に甘しとせざる者、或ひは多からん。（下略）」。

(9) 首藤水晶『水晶山人遺稿』一冊（天明二年（一七八二）刊）中の「藤文二墓墓碣」及び伊藤信『濃飛文教史』（博文堂書店、一九三七年刊、九二〜九三頁）による。

(10) 『日本名家詩選』の凡例のうち、論旨と關係する箇所について白文・訓読を掲げる。なお、この凡例では「本集」と言った場合、『日本名家詩選』の底本となる各詩人の別集のことを指している。「一、是編多就諸家本集而輯之。故其集多者輯者亦多、寡者隨寡。不必以詩多寡為作者工拙也（是の編、多く諸家の本集に就きて之を輯む。故に其の集の多き者は、輯むる者も亦た多し。寡き者は、隨ひて寡し。必ずしも詩の多寡を以て作者の工拙と為さざるなり）。「一、諸家声名既籍々、而其集未刻、僅一二与同志之詩合刻之。薰蕕相乱者亦有之。是編称名家、則不得不列其猶也（諸家の声名、既に籍々として、而して其の集、未だ刻せずして、僅かに一二を同志の詩とともに之を合刻す。薰蕕、相ひ乱るる者、亦た之有り。是の編は名家と称すれば、則ち其の猶を列らざるを得ざるなり）。「一、每字旁、以国字注之、令蒙士易読也。本集有有之者、有無之者、無者則添之、雖有之者不必從其旁法而注之要取其易読已。豈必拘拘於本集乎哉（每字の旁、国字を以て之に注するは、蒙士をして讀みやすくせしむるなり。本集に之有る者有り、之無き者有り。無き者は、則ち添へ、之有る者と雖も、必ずしも其の旁法に従はずして之に注す。要は其の讀み易きを取るのみ。豈に必ずしも本集に拘拘たらんや）」。

(11) 近世期の漢詩詞華集の研究としては、前田愛「雲如山人伝―幕末詞壇への一視角」〔『文学』三八卷一〇号、一九七〇年一〇月〕、

鷺原知良「『五山堂詩話』と化政期の漢詩選集」(『江戸文学』二四号、二〇〇一年二月)、同「竹内楊園編『嘯鳴集』について」(『語文』八四・八五号、二〇〇六年二月)、高島要「『日本詩選採摺書目』考稿(一〜四)」(『石川工業高等専門学校紀要』四一〜四四号、二〇〇九〜二〇一二年)などがある。なお、今日では、『詞華集 日本漢詩』(汲古書院、一九八三〜八四)が、近世の漢詩詞華集研究の標準的な資料集となっているが、本書の分析対象である二書は収録されていない。

(12) ロバート・キャンベル「獄舎の教化と『文学』」(『国語と国文学』八〇巻二一号、二〇〇三年一月)。

(13) 乾照夫「成島柳北研究」(べりかん社、二〇〇三年)、二一九頁。

(14) 『今古詩集丑集』には、木戸の詩以外に、廣瀬淡窓「咏史」、同「題探樵図」、小野湖山「詠古墨」、藤森弘庵「書悶」、林鶴梁「夜坐」、稲垣某「皿邸歌」、上田陸舟「咏史」、小原鉄心「偶感」の詩が記されている。これらは、すべて『才子必誦 崑山片玉』に収録されており、「稲垣某」をはじめ、作者名の表示方法なども一致している。

(15) 『統和漢名詩鈔』には、「送菅麟嶼」、「少年行」(○)、「還館作」(○)、「春台望」(△)、「古風五解、送泉次公還郷」(△)が、「和漢名詩類選評釈」には、「寄題豊公旧宅」(○)、「還館作」(○)、「東都四時樂四首」(東叡山頭花似氣)及び「両国橋辺動權歌」(の二首)が収録されている。丸印を付したものが、『日本名家詩選』にも収録されている詩、三角印を付したものが、『日本詩選』に収録されている詩である。

## 附記

本論は、第三六回和漢比較文学会大会(二〇一七年一月一日、大手前大学)における発表に基づくものです。発表後、田部知季氏、中村健史氏、新稲法子氏、堀川貴司氏をはじめ、諸先生より貴重なご教示を賜りました。あつく御礼申し上げます。また、貴重な資料の閲覧をお許しいただいた法政大学図書館、ともにこの問題について考えてくれた二〇一七年度慶應義塾大学「国文学演習」の受講者に深謝いたします。

本論は、国文学研究資料館公募型共同研究「日本漢詩文における古典形成の研究ならびに研究環境のグローバル化に対応した日本漢文学の通史の検討」の成果の一部である。

(表1) 『随録詩集 第一編』冒頭部の収録詩とその出処

・「抄出」の列の「崑」は「才子必誦 崑山片玉」より抄出された詩を、「名」は『日本名家詩選』より抄出された詩を表す。

・冒頭の詩のみを表にし、大原親山「咏剣」より後に抄出された詩は掲載していない。

番号	作者名	詩題	抄出
1	物俣徠	送菅麟嶼之京師	崑
2	服部南郭	回郷	崑
3	新井白石	雪	崑
4	祇園南海	昇雲開星	崑
5	柴栗山	富岳	崑
6	柴栗山	答人求旧草	崑
7	市川寛斎	東坡赤壁図	崑
8	栢如亭	別硯詩并序	崑
9	大窪詩佛	舟中聞虫	崑
10	朝川善庵	詠史	崑
11	藤田東湖	瓢兮歌	崑
12	藤田東湖	金沙山	崑
13	山中天水	臨終題	
14	龍草廬	遊平安思故郷	
15	源洞巖	贈烟管白石并呈詩	
16	新井白石	謝洞巖贈烟管	
17	日下梁	柴庵小集	
18	大窪江山	失題	
19	石雪堂	勝情	
20	太田覃	望岳	
21	太田覃	古意	
22	太田覃	宮怨	
23	物茂卿	新嫁娘	名
24	伊藤長胤	塞下曲	名
25	服元喬	長安道	名
26	服元喬	雪中作	名
27	平玄中	送維勉游湘中	名
28	勝忠統	季夏得蓐	名
29	岡孝先	不掃逕	名
30	石之清	早秋	名
31	梁田邦美	斃曲	名
32	字鼎	新柳	名
33	字鼎	題巢父許由図	名
34	秋儀	望芙蓉峰	
35	秋儀	同高子式賦得將進酒戲贈大川上人	名

番号	作者名	詩題	抄出
36	秋儀	前溪女	名
37	秋儀	古意	名
38	山根清	聽曉鶯	名
39	山根清	清暑瀑	名
40	田長温	春日送村玄探	名
41	藤舜政	閨怨	名
42	南宮岳	雪中梅	名
43	南宮岳	家書不至	名
44	江都綬	斃曲	名
45	大江資衡	古意	名
46	釈敬雄	夏日即事	名
47	物茂卿	寄題豊王旧宅	名
48	太宰純	梅童子墓	名
49	太宰純	登白雲山	名
50	服元喬	明妃曲	名
51	平玄中	早發深川	名
52	高維馨	楊柳堤春望	名
53	秋儀	滑水	名
54	墨昭猷	送一枝上人之江東	名
55	祇瑜	魚家月	名
56	石正猗	懷倉美叔	名
57	山根清	王昭君墓	名
58	田長温	西宮春怨	名
59	南宮岳	江亭送客	名
60	岡孝先	陪林祭酒宴賦經筵分賜	名
61	江都綬	賦楊柳枝送文栄還郷	名
62	那波祐昌	背面美人図	名
63	龍公美	秋曉	名
64	釈玄海	送人之駿州	名
65	苔茶山	鍾植掣鬼図	
66	藪孤山	赤馬関作	
67	維章輔	姫嶋作	
68	大原親山	題墨菜	
69	大原親山	失題	
70	大原親山	咏剣	

(表2) 『才子必誦 崑山片玉』(部分) 収録詩とその抄出状況

- ・「抄出」の列の丸印は、『随録詩集 第一編』に抄出された詩を表す。
- ・物徂徠「送菅崎嶼之京師」詩より前に掲出された詩や、藤田東湖「金砂山」より後の詩は、表に掲出していない。
- ・作者名については、『日本名家詩選』に記されたもののほかに、括弧付で通行のものを補った。
- ・同題の詩で複数の詩篇を含む場合、二首目以降を「同」と記し、各詩篇の第一句を括弧付きで付した。
- ・題注は、隅付き括弧で示した。

番号	作者名	詩題	抄出	番号	作者名	詩題	抄出
1	物徂徠(荻生徂徠)	送菅崎嶼之京師	○	35	館柳湾	山居	
2	物徂徠(荻生徂徠)	送君舜遊函嶺		36	青山雲竜(青山延子)	花下歩月	
3	太宰春台	送菅崎嶼之京師		37	青山雲竜(青山延子)	上元日、与館僚諸子遊梅莊	
4	服部南郭	回郷	○	38	青山雲竜(青山延子)	感遇(明珠出東海～)	
5	仲村悒斎(中村悒斎)	自題肖像		39	青山雲竜(青山延子)	同(鴻鶴殿翻時～)	
6	新井白石	雪	○	40	青山雲竜(青山延子)	同(幽蘭生澗底～)	
7	神崎則休	浅草眺望		41	藤田幽谷	謁舜水先生墓、聊短述	
8	木村貞行	述懷		42	藤田幽谷	秋興和韻	
9	梁田蛻巖	題大石良雄氏竹雀図		43	藤田幽谷	題沐猴盛服図	
10	梁田蛻巖	雑咏		44	太田南畝(太田南畝)	富士山	
11	祇園南海	昇雲聞星	○	45	安積良斎	春晚	
12	奥田三角	食禁歌		46	安積良斎	富士山	
13	細井平洲	感懷(少来心事与誰云～)		47	安積良斎	伊豆道中	
14	細井平洲	同(少壯游踪逐軒蓬～)		48	阪井虎山	咏四十七士	
15	蒲生君臧(蒲生君平)	雑詠(国造維封建～)		49	阪井虎山	咏英風扇【扇中帖桜花、即大石良雄手栽者】、为好古堂主人	
16	蒲生君臧(蒲生君平)	同(聖人長不出～)		50	阪井虎山	望京師	
17	蒲生君臧(蒲生君平)	謔作		51	斎藤拙堂	読老蘇文	
18	柴栗山(柴野栗山)	富岳	○	52	筒井鑾溪	夏日望岳	
19	柴栗山(柴野栗山)	答人求旧草	○	53	頼山陽	雑詩	
20	岡本花亭	猿猿【自註戊戌秋信中猿害人甚】		54	頼山陽	校外史竟宴、分賦近古英雄、吾得安土公	
21	岡本花亭	愛憎三首(美日芳時紅嗑鬧)		55	頼山陽	題利休居士像	
22	岡本花亭	同(巨耐愛与憎～)		56	藤田東湖	瓢兮歌	○
23	岡本花亭	同(顔戸月來壺～)		57	藤田東湖	金砂山	○
24	市河寛斎	東坡赤壁図	○				
25	亀井南溟(亀井南冥)	謁徂徠先生墓					
26	山本北山	今戸新居雑咏(数間低屋傍江干～)					
27	山本北山	同(経営新塲栽花樹～)					
28	柏如亭(柏木如亭)	別硯詩并序	○				
29	柏如亭(柏木如亭)	賃居					
30	太田錦城(大田錦城)	梅花					
31	太田錦城(大田錦城)	冬日即事					
32	渡辺華山(渡辺華山)	題自画竹					
33	大窪詩仏	舟中聞虫	○				
34	朝川善庵	詠史	○				

(表3)『日本名家詩選』(巻6・7)収録詩とその抄出状況

- ・「抄出」の列の丸印は、『随録詩集 第一編』に抄出された詩を表す。
- ・巻6・7所収の詩のみを掲出した。
- ・作者名については、『日本名家詩選』に記されたもののほかに、括弧付で通行のものを補った。
- ・同題の詩で複数の詩篇を含む場合、二首目以降を「同」と記し、各詩篇の第一句を括弧付きで付した。

番号	作者名	詩題	抄出	番号	作者名	詩題	抄出
1	伊藤維楨(伊藤仁斎)	蓮池		34	岡孝先(岡井孝先)	将赴水府至千寿駅、别友人	
2	新井璵(新井白石)	西丘初日		35	板安也	従軍行	
3	新井璵(新井白石)	代兩伯陽寄題八奇亭		36	板安也	秋閑怨	
4	物茂卿(荻生徂徠)	新嫁娘	○	37	石之清(石川大凡)	早秋	○
5	物茂卿(荻生徂徠)	濟斎席上同賦浣紗女分韻荷字		38	菅正朝(山田麟嶼)	山行	
6	伊藤長胤(伊藤東涯)	塞下曲	○	39	梁田邦美(梁田蛻巖)	咏龍鳥	
7	原龍鱗(笠原雲溪)	秋晚郊居		40	梁田邦美(梁田蛻巖)	夏日作	
8	原龍鱗(笠原雲溪)	婕妤怨		41	梁田邦美(梁田蛻巖)	艶曲	○
9	原龍鱗(笠原雲溪)	雨後晚涼得取字		42	宇鼎(宇野明霞)	新柳	○
10	室直清(室鳩巢)	重陽(故人無恙否～)		43	宇鼎(宇野明霞)	題果父許由図	○
11	室直清(室鳩巢)	同(病中秋欲晚～)		44	宇鑒(宇野志朗)	送人婦越	
12	山県孝播(山県周南)	宿鳴海駅壁上有詩、乃故山原欽少年之作、輒然次韻		45	澤維顛(沢村琴所)	探芳徑	
13	田省(田中綱江)	画燕子花		46	澤維顛(沢村琴所)	林莊漫興	
14	田省(田中綱江)	和楓江雅友所寄韻		47	高維馨(高野蘭亭)	惜花	
15	服元喬(服部南郭)	塞下曲		48	高維馨(高野蘭亭)	題画	
16	服元喬(服部南郭)	戲代内人示五鹿生二首(君道讀書去～)		49	高維馨(高野蘭亭)	戲題鷓鴣盃	
17	服元喬(服部南郭)	同(知就高陽飲～)		50	秋儀(秋山玉山)	望芙蓉峰	○
18	服元喬(服部南郭)	春雨		51	秋儀(秋山玉山)	同高子式賦得將進酒、戲贈大川上人	○
19	服元喬(服部南郭)	題画		52	秋儀(秋山玉山)	别高子式	
20	服元喬(服部南郭)	長安道	○	53	秋儀(秋山玉山)	前溪女	○
21	服元喬(服部南郭)	忍海上人見贈盆荷并詩、云是笠蓮答謝		54	秋儀(秋山玉山)	古意	○
22	服元喬(服部南郭)	雪中作	○	55	秋儀(秋山玉山)	志賀歌	
23	平玄中(平野金華)	送維迪游湘中	○	56	秋儀(秋山玉山)	夜歸	
24	平玄中(平野金華)	過山伯麟旧居		57	秋儀(秋山玉山)	琴橋	
25	秋以正(秋元澹園)	春簡東濫芋		58	田良暢(田中蘭陵)	和高子式卜居韻(江流流不尽～)	
26	藤忠統(本多忠統)	春興(花飛綺羅席～)		59	田良暢(田中蘭陵)	同(行欲伴仙子～)	
27	藤忠統(本多忠統)	同(人生七十年～)		60	山根清(山根華陽)	聽晚鶯	○
28	藤忠統(本多忠統)	題盆石蟠松		61	山根清(山根華陽)	清暑瀑	○
29	藤忠統(本多忠統)	季夏得蓐	○	62	田長温(田坂滿山)	関山月	
30	藤元啓(伊藤南昌)	猿猴啼		63	田長温(田坂滿山)	春日送村玄探	○
31	源義治(久津見華嶽)	詠史		64	藤舜政(近藤蘆隱)	閑怨	○
32	島信遍(成島錦江)	梅花落		65	服惟恭(服部恩卿)	長信宮	
33	岡孝先(岡井孝先)	不掃徑	○	66	服惟恭(服部恩卿)	寄懷仲英時在拱米花谷	
				67	服元雄(服部白貢)	東沢(樓上青山起～)	

番号	作者名	詩題	抄出
68	服元雄（服部白負）	同（夜雨何處來～）	
69	服元雄（服部白負）	旧宮人	
70	服元雄（服部白負）	兩竹園	
71	井孝徳（浪井太室）	憶喬卿	
72	南宮岳（南宮大湫）	雪中梅	○
73	南宮岳（南宮大湫）	家書不至	○
74	南宮岳（南宮大湫）	綠水曲	
75	紀徳民（細井平洲）	渡広陵	
76	紀徳民（細井平洲）	姫人怨服散	
77	紀徳民（細井平洲）	宮子動墓碑成有感	
78	武欽繇（武田梅龍）	冬夜	
79	江朝綏（江村北海）	艶曲	○
80	江朝綏（江村北海）	嵯峨途中口号	
81	芥煥（芥川丹丘）	絶句	
82	谷鸞（谷左仲）	將進酒	
83	那波祐昌（那波南陽）	訪隠者不遇	
84	劉維翰（宮瀬龍門）	塞下曲	
85	劉維翰（宮瀬龍門）	雪中寄野処士	
86	劉維翰（宮瀬龍門）	送太乙山人婦浪華	
87	龍公美（龍草廬）	買琴	
88	龍公美（龍草廬）	江上送客	
89	龍公美（龍草廬）	重別関南仲	
90	孔文雄（目下生胸）	悼弟文盈	
91	斎必簡（斎静斎）	送嵩生暫游浪華	
92	大江資衡（大江玄圃）	古意	○
93	安修	山行值雪	
94	釈元皓（大潮元皓）	山房	
95	釈元皓（大潮元皓）	山中和石叔潭	
96	釈円乗	夜坐	
97	釈道費	送千丈長老婦江州	
98	釈敬雄（金竜敬雄）	留客辭	
99	釈敬雄（金竜敬雄）	夏日即事	○
100	釈顕常（大典顕常）	梅花時、待人不至	
101	伊藤維楨（伊藤仁斎）	即興	
102	伊藤維楨（伊藤仁斎）	杜鵑	
103	新井瑛（新井白石）	偶作	
104	新井瑛（新井白石）	辞祿後答山東故人	
105	新井瑛（新井白石）	紀司馬席上賦宮詞	
106	新井瑛（新井白石）	梅影	
107	物茂卿（荻生徂徠）	少年行	

番号	作者名	詩題	抄出
108	物茂卿（荻生徂徠）	還館作	
109	物茂卿（荻生徂徠）	同孤山遊蓮光精舍分韻	
110	物茂卿（荻生徂徠）	寄題豊王旧宅	○
111	伊藤長胤（伊藤東涯）	早春郊行	
112	伊藤長胤（伊藤東涯）	題太公釣渭園	
113	伊藤長胤（伊藤東涯）	自隠老禪還住旧离庭有孤松葱翠如昔	
114	原龍鱗（笠原雲溪）	新秋	
115	原龍鱗（笠原雲溪）	從軍行	
116	原龍鱗（笠原雲溪）	長安春事	
117	原龍鱗（笠原雲溪）	寒夜郊行	
118	室直清（室鳩巢）	春日山	
119	太宰純（太宰春台）	題佐佐木氏堂前垂糸桜	
120	柳三省（柳川涪洲）	曉鶯	
121	藤煥因（安藤東野）	婦雁	
122	太宰純（太宰春台）	梅童子墓	○
123	太宰純（太宰春台）	登白雲山	○
124	山県孝孺（山県周南）	朝鮮二使席上出示瓶梅露詩、押以梅開蓋字	
125	山県孝孺（山県周南）	長安道	
126	山県孝孺（山県周南）	玉江秋月	
127	田省（田中桐江）	秋興	
128	田省（田中桐江）	送皎禿禪師還湖南	
129	服元喬（服部南郭）	夜下墨水	
130	服元喬（服部南郭）	春官曲	
131	服元喬（服部南郭）	俠客	
132	服元喬（服部南郭）	六月送江山人婦嵐山	
133	服元喬（服部南郭）	山友石自豊齋詩至訪予不在、携婦客舍、俄而没其友緩部子為悲其事、微予題遺碑、予亦為之愴然作兼代弔詞	
134	服元喬（服部南郭）	宮詞	
135	服元喬（服部南郭）	明紀曲	○
136	服元喬（服部南郭）	過羽処士江亭	
137	服元喬（服部南郭）	答弥八間子和計見寄	
138	服元喬（服部南郭）	楚宮詞	
139	服元喬（服部南郭）	題遊仙園	
140	服元喬（服部南郭）	大磯駅眺望	
141	平玄中（平野金華）	早発深川	○
142	平玄中（平野金華）	諸子將集蓮光精舍值雨不果、奉呈卓上人	
143	平玄中（平野金華）	送田俊卿之美濃州	
144	平玄中（平野金華）	青樓曲	
145	平玄中（平野金華）	白鷺林山莊作	

番号	作者名	詩題	抄出
146	高維馨 (高野蘭亭)	俠客行	
147	高維馨 (高野蘭亭)	楊柳隄春望	○
148	高維馨 (高野蘭亭)	月夜三叉口汎舟	
149	高維馨 (高野蘭亭)	塞下曲	
150	高維馨 (高野蘭亭)	答玉泉道士見寄	
151	高維馨 (高野蘭亭)	鎌山草堂即事	
152	高維馨 (高野蘭亭)	明妃曲	
153	高維馨 (高野蘭亭)	菊菴禪師携菊花見過	
154	高維馨 (高野蘭亭)	雨中過牛頭寺、呈天岸禪師	
155	秋儀 (秋山玉山)	寄懷井冲黙於江都	
156	秋儀 (秋山玉山)	春宮怨	
157	秋儀 (秋山玉山)	渭水	○
158	秋儀 (秋山玉山)	少年行	
159	秋儀 (秋山玉山)	吉子敬善齋、亡後為整理其遺稿、則旧時与余唱和者皆有焉、誼之慨然有作	
160	平義賢 (三浦竹溪)	登長興山	
161	宇鑒 (宇野志朗)	潮禪師得余兄弟書見寄、次韻却寄	
162	源賴寛	聞徂徠先生携諸子泛舟墨川、賦此簡諸君	
163	源義治 (久津見華嶽)	寄木公達	
164	島信遍 (成島錦江)	吳宮詞	
165	江忠固 (入江南漢)	吳宮詞	
166	墨昭猷 (墨江滄浪)	送一枝上人入江東	○
167	瀧長愷 (瀧鶴台)	寄答吉公亮	
168	瀧長愷 (瀧鶴台)	送平景端中秋遊金沢	
169	秋以正 (秋元澹園)	題園城寺	
170	爽鳩正長 (鷹見爽鳩)	寄懷德夫	
171	宇鼎 (宇野明霞)	普周禪師既喪其師、去越後過丹波偶暫遊洛、和余旧贈、携以過訪賊呈	
172	宇鼎 (宇野明霞)	明霞軒 (十年京洛幾移居～)	
173	宇鼎 (宇野明霞)	同 (綠酒青樽帝里春～)	
174	宇鼎 (宇野明霞)	西郊作	
175	宇鼎 (宇野明霞)	送人遊大和	
176	宇鼎 (宇野明霞)	和西黎賦、雲後見懷	
177	祇瑜 (祇園南海)	賦得春色	
178	祇瑜 (祇園南海)	魚家月	○
179	梁田邦美 (梁田蛻巖)	和桂彩巖見寄 (郡城東望渺烟波～)	
180	梁田邦美 (梁田蛻巖)	和桂彩巖見寄 (仙郎消息易蕭條～)	
181	梁田邦美 (梁田蛻巖)	美人睡起	
182	梁田邦美 (梁田蛻巖)	美人折梅花	
183	梁田邦美 (梁田蛻巖)	謝長寿院慧法師白牡丹	
184	梁田邦美 (梁田蛻巖)	冬日江村	

番号	作者名	詩題	抄出
185	元維寧 (中西淡淵)	寄石叔譚	
186	石正筠 (石島筑波)	壬子冬帰田盧時止酒	
187	石正筠 (石島筑波)	懷倉美叔	○
188	木貞貫 (木村蓬萊)	贈南潤隱君	
189	山根清 (山根華陽)	銅雀妓	
190	山根清 (山根華陽)	春日行	
191	山根清 (山根華陽)	折楊柳	
192	山根清 (山根華陽)	王昭君墓	○
193	山根道晋 (山根濟洲)	送野正李之京師	
194	田長温 (田坂瀨山)	送嶋仲容歸豊浦	
195	田長温 (田坂瀨山)	西宮春怨	○
196	田長温 (田坂瀨山)	西宮秋怨	
197	田長温 (田坂瀨山)	与諸友登鶴台望海、分韻得西字	
198	田良暢 (田中蘭陵)	送岡峰師還函嶺	
199	藤舜政 (近藤蘆隱)	真間舟中吟	
200	藤舜政 (近藤蘆隱)	雜詩	
201	服惟恭 (服部恩卿)	聞雁	
202	服惟恭 (服部恩卿)	觀帆	
203	服元雄 (服部白賁)	海門送別	
204	服元雄 (服部白賁)	早下刀瀨河到鹿洲	
205	服元雄 (服部白賁)	聞恩卿訃、恨然有作	
206	服元雄 (服部白賁)	送人帰隱湖南	
207	服元雄 (服部白賁)	步虛詞	
208	服元雄 (服部白賁)	答蒼少卿見贈	
209	服元雄 (服部白賁)	春晚怨	
210	服元雄 (服部白賁)	香山師惠菊花枕賦謝	
211	松維時 (松崎觀海)	送平景端中秋遊金沢	
212	南宮岳 (南宮大湊)	出塞行	
213	南宮岳 (南宮大湊)	江亭送客	○
214	南宮岳 (南宮大湊)	秋雨宿関原駅	
215	南宮岳 (南宮大湊)	宮怨	
216	南宮岳 (南宮大湊)	塞下曲、得閑字	
217	南宮岳 (南宮大湊)	秋日得石川太一長崎書	
218	南宮岳 (南宮大湊)	早春送智願師之白河	
219	南宮岳 (南宮大湊)	春晚別人	
220	南宮岳 (南宮大湊)	秋夜懷公幹	
221	紀德民 (細井平洲)	長安曲	
222	紀德民 (細井平洲)	至崎港	
223	紀德民 (細井平洲)	送仲栗之撰州	
224	紀德民 (細井平洲)	聞淡淵先生臥病、遙有此寄	

番号	作者名	詩題	抄出
225	紀徳民（細井平洲）	子静淹留張州、戯有此寄	
226	紀徳民（細井平洲）	送山逸人	
227	紀徳民（細井平洲）	送逢楊卿婦西條	
228	澤維顯（沢村琴所）	秋閨怨	
229	澤維顯（沢村琴所）	冬夜感懷	
230	澤維顯（沢村琴所）	歸郷途中作	
231	澤維顯（沢村琴所）	悼亡	
232	岡孝先（岡井孝先）	過根香七曲	
233	岡孝先（岡井孝先）	陪林祭酒宴、賦経筵分賜	○
234	江朝綏（江村北海）	賦楊柳枝、送文榮還郷	○
235	江朝綏（江村北海）	自小倉堤至玉水駅、途中偶作	
236	江朝綏（江村北海）	送碓溪上人還郷	
237	芥煥（芥川丹丘）	浪華送趙陶齋帰京	
238	芥煥（芥川丹丘）	夏日漁村	
239	谷鸞（谷左仲）	天馬詩	
240	那波祐昌（那波南陽）	春日偶作	
241	那波祐昌（那波南陽）	背面美人図	○
242	劉維翰（宮瀬龍門）	慰熊耳山人	
243	劉維翰（宮瀬龍門）	宮詞	
244	劉維翰（宮瀬龍門）	楚宮詞	
245	龍公美（龍草廬）	題長禹功画朱竹図	
246	龍公美（龍草廬）	過澗堤	
247	龍公美（龍草廬）	過湖	
248	龍公美（龍草廬）	集伏水郎氏宅、賦江上春望	
249	龍公美（龍草廬）	嵯峨道中	
250	龍公美（龍草廬）	訪終南禪師於介石菴不遇	
251	龍公美（龍草廬）	夏日過汶々齋即事	
252	龍公美（龍草廬）	春遊	
253	龍公美（龍草廬）	秋眺	○
254	龍公美（龍草廬）	題箕山慈恩寺	
255	孔文雄（目下生駒）	山房即事	
256	孔文雄（目下生駒）	雪中訪友	
257	斎必簡（斎静齋）	江城送別	
258	斎必簡（斎静齋）	川上暮春	
259	大江資衡（大江玄圃）	贈武聖謨	
260	井純卿（井上金峨）	平景端仲秋金沢賞月賦贈	
261	立花玉蘭	宮怨	
262	立花玉蘭	送曇龍師之東都、兼奉寄東林和尚	
263	釈原資	含虛亭看花	

番号	作者名	詩題	抄出
264	釈原資	遊東山	
265	釈原資	塞上詞	
266	釈原資	涼州詞	
267	釈元皓（大潮元皓）	秋夜	
268	釈元皓（大潮元皓）	二月朔淀河舟中作	
269	釈元皓（大潮元皓）	寓懷	
270	釈敬雄（金竜敬雄）	秋日寄懷勤修上人	
271	釈敬雄（金竜敬雄）	寄贈張州木蘭阜	
272	釈慧巖	寄服子還	
273	釈慧巖	長安客舍待赴南都留別故人	
274	釈慧寂	早春宴江子園宅	
275	釈玄海	送人之駿州	○
276	釈無隠	謝築氏為老夫買園	
277	釈無隠	秋夜	
278	釈無隠	春遊	
279	釈顯常（大典顯常）	奈良宿中沼氏	
280	釈顯常（大典顯常）	雨中鹿苑院看桜花	